

◆経営と健康⑥7

日本最初の商社結成

あまか
天翔ける

坂本龍馬 ③

一龍斎貞花

講談師

江戸での遊学から土佐へ帰国した坂本龍馬は、西洋事情に詳しい河田小龍を訪ね、「外国と戦って勝てるはずがない。勝つためには開国して諸外国の文化を取り入れる必要がある。外国の汽船を手に入れ航海術を身につけなければいけない」この教えが、後の海援隊を組織する大きな要因となります。

二度目の江戸修行中、井伊直弼が独断で日米修好通商条約に調印。反対する者を片っ端から罰した安政の大獄。藩主山内容堂も隠居・謹慎処分を受け、帰国した龍馬は尊王攘夷の心を強くし、武市半平太の土佐勤王党に加盟。半平太は、土佐藩の実権を握る公武合体派の吉田東洋を暗殺し、藩の実権を握ったものの、公武合体派が巻き返し武市は捕らえられ後藤象二郎に切腹させられます。しかしこの間龍馬は、政権を奪うためには手段を

選ばぬやり方に嫌気がさし土佐藩だけで動くことに限界を感じたのか、土佐勤王党を脱退、更に土佐を脱藩し江戸へ入り、勝海舟に面会し、弟子となったのでございます。その後海舟が、容堂にあって龍馬の脱藩を許してもらいます。海に囲まれた島国でありながら海軍がない、軍艦もない。英国が香港を手に入れられたようにアメリカやロシアが日本を侵略しないとも限らない。海舟が海軍操練所設立を将軍家茂に願い出るや許可され、神戸に土地1万坪、年間予算3千両。海舟塾から龍馬以下約90名、総勢2百名の生徒。オランダ語、数学、運用学、武術など、船を動かすことだけでなく実用的な教育が行われたのでございます。

攘夷の急先鋒長州藩

長州藩は、幕府の弱腰にしびれを切らし関門海峡に停泊中や、通行の各国の軍艦に大砲をぶっ放した。驚いた外国の船は逃げ去り攘夷成功と大喜びするも、各国の軍艦が反撃、軍事力の差は大きく長州藩はなすすべもなし。損害を受けた外国船は江戸湾で公然と修理を行っていた。

「長州の攘夷派の無謀さもさることながら、幕府の不甲斐なさはなんたること」と龍馬は、姉の乙女に、「このままでは我が国は外国の餌食となってしまふ。国を売るような幕府の役人共を討ち、日本を今一度洗濯する必要がある」と手紙を。一時知事たちのせんたく会議という名目

が注目されたのも、この手紙によるものです。

尊王攘夷の過激な行動が、公武合体派の反発をよび一夜にして政局は一変し、攘夷派は京都から一掃され、七卿落ち。新撰組が血の雨を降らせる。土佐藩でも勤王党の弾圧がはじまり、神戸海軍塾の龍馬に帰国命令。帰れば投獄されること確実と再び脱藩、近藤長次郎、沢村惣之丞なども脱藩し京都の方広寺に潜伏。他藩の者など数十人とあってまかないなど世話してくれる者が必要。雇われたのがお龍の母のお貞。お龍は母の手伝いに方広寺へ。医師の父が亡くなり生活苦から旅館などで働いていた、細面ほそおもての京美人、龍馬は自分と名前が似ているところも気に入ってか、定宿で世話してくれている寺田屋のおかみお登勢に頼んで、母娘を預かってもらいます。

新撰組が池田屋を襲撃し、長州の宮部鼎蔵ていざう、吉田稔磨としまろはじめ土佐の同志など20余名が殺され捕らえられてしまった。

多くの仲間を失った長州藩は、久坂玄瑞、真木和泉ら2千の軍勢で都へ進軍するも、会津、薩摩を中心とする幕府軍に滅ぼされ、この禁門の変によって長州は壊滅の危機におちいったのでございます。

攘夷派の反乱が続いたことから幕府は過激浪士の取り締まりを強化。海軍操練所の塾生の身元を調べると脱藩者や、勤王派の者がいることがわかり、「海舟は幕臣でありながら、勤王倒幕の浪士達を育

成しているのはけしからん」と、幕府は海舟の軍艦奉行を罷免、海舟は長州から狙われるばかりではなく、「あいつは幕府を売る犬だ」と幕府の中にも狙う者がいた。龍馬も同じく、脱藩者で過激な行動をする奴だと、新撰組は勿論、土佐藩士からも狙われていた。

海軍操練所が閉鎖され、塾生の身のふり方を心配した海舟は、かつて対面し意気投合している西郷隆盛に、「坂本以下約30名の浪士をかくまってほしい」と依頼し、大阪の薩摩屋敷にかくまわれることになります。

「坂本さん、家老の小松帯刀殿を紹介しよう」小松は家老として、西郷、大久保利通を評価して巧みにリード。薩摩藩のあらゆる藩政をつかさどり、朝廷や幕府から信頼され、薩摩の影の宰相といわれた人物。36歳の若さで亡くなりましたが長生きしていたら首相になったであろうといわれたほどの人物。一昨年の大河ドラマ、篤姫の若き日恋人同様に描かれた人物。ここに帯刀、隆盛、龍馬の3人が話し合う機会が多くなり意気投合していったのでございます。

いよいよこれより、薩長同盟、亀山社中結成、大政奉還への船中八策など、新時代へ向けて龍馬が、天翔ける大働きをしようというお話は、次号のお楽しみ。ポポンポン。